# 維新志士　加藤龍吉小傳

土居寛申

## 前がき

昭和十七年春大分史談会が維新勤王家遺芳展を催した時同郷の後進加藤柾君（国学院出身教官）に会つたところ同氏の曰く「郷里の志士小串兄弟元田直其他については有名であるが我血縁に加藤龍吉なるものがあり、之も維新当時の志士の一人と思われるが一向世間に認められない、是非調査研究をしてほしい」と若干の資料を提示せられた。私は初耳であつたので、大いに興味を持ち色々調査して見たが、あまり資料は得られなかつた。其理由は後記により自然判明するが、一応乏しき資料に基き世に公にして置いて尚調査を進めたいと思つて居る。

### 第一、高橋是清自傳の一節　（八八―九四頁）

（少々長文だが説明の便宜上引用する）ダラース・リング事件の当時

明治三年ごろであつたと思ふ、大学南校にダラース・リング事件といふものがあつた。ダラースといふ人は、横浜の商人であつたが、家柄のよい生れで何でも祖父さんか何かゞ米国の副大統領になつた事があるとか聞いていた、至極上品ないゝ人であつた。キヤプテン、リングは以前上海あたりにいて日本にやつて来た人で、この二人は共に相当教育のある人々であつた。

当時護持院ケ原といつて大学南校の前に原があり、外国教師の役宅はその原の中に別々になつて建つていた。ダラースの家には南校の教員をしていた深沢要橘といふ人が同居同様にしていた、またリングの方には小泉敦といふ教員が常に出入していた、これらの教員が外人のところに同居同様にしていたのは語学の稽古をするためであつた、

ところがこの二人の外人がいつの間にか妾を囲ふことを覚えて仕舞つた、勿論役宅に引入れることは出来ないから時々妾宅に泊りに行く、さうしてこの二人の日本人の教員はその周旋をしたり、或は泊りに行く時に一緒に行つたりしていた。

ある時フルベッキ先生邸の私の部屋に若い教員連が集つて歴史の回読などしていると、そこへ慌しく小泉が駈け込んで来て今学校からの知らせに須田町の附近でダラースとリングの両先生が斬られて二人とも大通の紙屋で手当を受けていると知らせた。そこで居合した一同は大いに驚き早速現場に駆けつけた。行つて見ると二人は店先に積み上げられた日本紙に寄り掛かつて苦しんでいる、既に近所の医者がやつて来て傷口を洗ひ、縫つたところであつた。何れも後から斬られたものでリングは背中を一太刀、ダラースは背中と肩先に二太刀浴びせられている、店先には血の塊りなど落ちている。

その中に大学東校から医者が来て、寒いものだから火鉢に火を起して部屋を暖める、それに紙屋の店先では場所も狭くて何かに不都合だから丁度筋向いにある「しがらき」といふ待合茶屋が座敷も広いし設備もよいからといつて、そこへ引越すこととなり、高さ四尺ばかりに綿を積み重ね、その上に布を敷いて寝台代りにして二人をそれへ寝かした。

一通り怪我人の始末がついてから紙屋の亭主に、その時の模様を聞くと店の者がその日の帳面を締括つて店をしまひ、まだ潜戸だけ締めて戸は締めなかつた。ところが突然二人の外人が転げ込んで来た、それはダラースとリングであつた。「私達は大学南校の教師である、今斬られた、すぐ学校へ知らせてくれ」といふから直ぐ学校へ知らした。然るに傷は仲々の大傷だから急いで医者を呼んだが町医者だから、まづ焼酎で傷口を洗つて、それから縫ふ前に一升ばかりの酒を飲んで縫つたが手が顫へていた。リングは余ほど気丈の男で、いよいよ自分が危いと思つたのか、傷口を縫ふ時に自分の下げてをつた時計を出して自分が死んだら学校からこれを遺族に贈つてくれと遺言した。ダラースの方は弱つて殆ど口も利けなかつたといふことであつた。

「しがらき」に移ると語学の出来る教員は当分附き添うて看護することとなり、南校の小博士箕作圭吾さんがその看護長となつつて指図をした。それで我々は日々「しがらき」へ行つて通訳をしたり、病人のいふ事を聞いたりして看護の任に当つていた。

両人が負傷した翌々日になつて英国公使のパークスが見舞のため横浜から騎兵を随へてやつて来た、勿論政府はそれまでに

非常に心配して出来るだけの手配りをした。町医者の縫つたのが如何にもひどいから大学東校の医者が来ると、それらを縫ひ直した。それから「しがらき」の前十間ばかりの間は馬や車を通行止めにした上に、道の上には莚を敷いて通行人の足音がしないやうにした。又日本家であるから湯度を調節せねばならぬ、それと炭素の籠らないやうに真赤にした木炭を用ひて部屋を暖めていた。

さういふ風で手当も十分に行届き、気分もよくなつているところにパークスがやつて来たのでパークスも政府の手配りには余ほど満足したやうであつた。

三週間ばかりたつと傷も段々と癒え、気分もよくなり口も利けるやうになつた、我々は相かはらず交代で看護していたが、病人の気分のよい時をみてその夜の模様を聞くと、もともとリングの妾は日本橋界隈に住つてをり、ダラースの妾は神田方面に住つていた。その夜はリングとダラースはリングの妾を伴れ提燈を持つた小泉を先に立て、ダラースの妾の方へ行く途中であつた。神田近くになると左手の方に屋台店が列んでいる、リングとダラースとは妾をまんなかにして手を繋いで屋台店のところを通りかかつた。無論小泉は弓張提燈を持つて先に立つていた、するといきなりダラースが斬られた、ダラースは何だか冷りとしたので左の屋台店を廻つた、その間に二の太刀はリングに斬りつけて来た、リングは斬られると真直ぐに逃げ出した、そこへ屋台店の方へ廻つたダラースが再び右へ廻つて往来へ出たから、また一太刀浴びせられた。妾は何のこともなかつた、小泉も一緒に駆け出したがモウその時はどこも店を閉めていて助けを乞ふことが出来ない。須田町のあたりまで来ると紙屋の店が三尺ばかり明いていたので、そこへ飛込んで助けを乞ふた、小泉はそこから帰つて仕舞つて何喰はぬ顔をして私の部屋へやつて来た、といふことが判明した。このことが判ると小泉といふ奴は怪しからぬ、才一外人に妾を取持つたり、またこんな場合に逃げ帰るなんて男の風上にも置けぬ奴だ、それに帰つて来て知らぬ振りをしているなど、ます〳〵怪しからんと一同は大いに小泉を排斥して、たうとう学校から免職させて仕舞つた。

その後ダラースを斬つた男が捕つた、土佐の人であつたと思ふが、そのいひ分は、「一体皇国の婦人を夷狄が引張つて行く

のが不都合だと思つたから」といつていた。ダラースは犯人が捕まつたのを聞いて「ア、捕まつたか、我々は今の所では命は助かるから罪人はどうか死刑にならぬやうに希望する」といふ。それで私が「かくなつたのも畢竟貴公らの行動がよくなかつたからだ、日本の婦人を二人の中に入れて行つたのが殺害の動機らしい、加害者は相当に気概のある人であるから、もし教育が足りて世界の大勢を知るやうになつたら偉大なる人物となるかも知れぬ、貴公がそんな考へなら命乞ひをしてアメリカへやつて修業さしたらどうだ」と話すと、ダラースは「君のいふのは尤もだ、考へて命乞ひをしよう」といふ話であつた。

その後一月ばかりたつと大変に元気になつて、もう部屋の中を歩くやうになつた。二人はいつまでいても仕方がない早く役宅へ帰りたいとばかりいつていた。ところが或時深沢に「男ばかりでは不自由だから、妾をここへ呼んでもらいたい」といつた。これを聞いて一同は「我々が居るのに妾を呼ぶなんて怪しからぬ、俺達は妾と一緒にいるワケには行かぬ」とて大に激昂した。その後両人は役宅に引上げたが、たうとう妾を呼んで世話をさしたといふことである。

話は後にもどるが、この事件があつた翌日学校では学校の教員中に斬つた者があるのぢやないかと残らず刀を調べに来た、その時私の刀に血が附いているので大騒ぎとなつたが、それは前晩私の部屋に鼠が出て簞笥の後に逃げ込んだのを私が刺したので血の跡が残つていたことが判つて大笑ひとなつた。然しその位調べたのであるから他も随分調べたことであらう、斬つた人はたうとう斬罪に処せられた。

## 第二、維新後大年表（妻木忠太著）

明治三年十一月二十三日。「杵築藩卒加藤龍吉鹿児島藩士肥後壮七関宿藩士黒川友次郎大学南校雇教師リング、ダラスを傷く」

## 第三、国史大年表（日置昌一著）

明治三年十一月二十三日。「杵築藩士加藤龍吉鹿児島藩士肥後壮七関宿藩士黒川友次郎等東京神田鍋町の往来にて大学南校教師英人リンケ、タラスを傷く厳に之を捜索せしむ」

とあり高橋翁の所謂土佐人というのは杵築藩士等であることが判る。

## 第四、大政官日誌

一、明治三年十一月廿四日。東京府並近傍諸県へ御達書写。「昨廿三日夜於神田鍋町南校御雇入之英国人二名及傷害者有之府下厳密御吟味相成候ニ付其管内同様取締可致猶府下逋逃之者等無油断可遂捜索候事」

宮、華族へ御達書写。「昨廿三日夜於神田鍋町南校御雇入之英国人二名及傷害候者有之候ニ付テハ宮華族並ニ諸官員家人陪従之者等一々遂吟味昨夜外出之者ハ行先等委詳取札疑敷儀有之候得者早々可申出万一隠匿し後日発覚候ニ於テハ主宰之越度急度被及御沙汰候条此旨可相心得事」

二、明治四年三月二十五日。「去冬十一月廿三日夜東京神田鍋町ニ於テ英人ニ傷ケ候者有之厳密御捜索御召捕今般別紙之通御処刑ニ相成候元来外国御交際者重大之儀ニ付屢御布令相成候処右様之次才有之候テハ御政体ニ関係シ御国辱ニモ相成候条尚又府県管内末々迄心得違無之様取締可致事」

別紙（刑部省申渡）

卒喜兵衛伴ニテ脱走致シ候山口幸太郎ト申立候　加藤龍吉

其方儀関宿藩黒川友次郎同道日本橋辺通行之砌大学南校御雇教師英人リング外壱人婦人ヲ携士体ノ者附添相越候ヲ見受彼ヲ可打果旨及発言候ヨリ友次郎致同意同人倶々跡ヲ附参リ神田鍋町ニオイテ抜刀リングヘ為疵負候段御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業右始末不届ニ付庶人ニ下シ絞罪申付ル

鹿児島藩　士族　肥後壮七

其方儀佐土原藩永田弥太郎外壱人一同神田鍋町通行之砌杵築藩加藤龍吉外一人ニテ大学南校御雇教師英人リング、ダラスヲ及刃傷候儀ニハ不心得附右英人狼狽ノ体ニテ逃参候機ニスレ合候ヨリ俄ニ怒気相発シ追駈リングヲ及刃傷候事実ニ候ハヾ其段有体可申立処都テ一己ノ仕業ニ一旦申成シ罷在追テ龍吉外壱人右ヲ白状ニヲヨビ候由承リ候節ニ至リ右ニ携候儀ハ勿論鍋

町辺通行候覺無之杯彼是云紛シ候段御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業右始末不届ニ付庶人ニ下シ敍罪申付ル。

関宿藩、如虹伴脱走致シ候　黒川友次郎

其方儀杵築藩加藤龍吉同道日本橋辺通行之砌大学南校御雇教師ダラス外壱人婦人ヲ携士体之者附添相越候ヲ見受彼ヲ打果旨龍吉及発言候ニ致同意俱ニ跡ヲ附参リ神田鍋町ニオイテ抜刀ダラスヘ為疵負候段御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業右始末不届ニ付庶人ニ下シ准流十年申付ル。

右に依ると高橋翁の所謂斬罪は絞罪であつたらしい。

右二、三の資料で事件の内容は推測せられると思う。当時一部に排他思想盛であつて本件の如き夷狄の癖に大和撫子を弄ぶのは怪しからぬというのであろうが正に国際問題たるべき大事を惹起し幸に事なきを得たが現今から考えると無茶なことをしたものというの外ない。然し当時としては此も志士たるものゝ一面であつたかも知れぬ。

## 第五、龍吉の身元調

龍吉という人はどんな経歴の所有主であつたかと調べて見たが一向判らぬ、加藤枉氏が古老其他から聞知したという談等を綜合して見ると龍吉の弟楽も兄が国法を冒したと云う訳で余り多くを語ることを好まなかつたらしい。然るに茲に、

「諸御達並進達書」（明治二巳嶋年分、旧杵築県）という古記録を見ると左の如き一項がある。

同年十一月晦日民部省江進達、

脱藩浮浪人之儀ニ付昨年末毎々被仰出候厚キ御趣意之趣体認仕戸籍人別取調候処先年末脱籍之者何分行衛相知レ不申分別紙ノ通ニ御座候尚此上精々穿鑿復籍取計可仕候得共一応御届可申上旨杵築表ヨリ申付越候間姓名年令年月等相認メ此段御届申上候以上

十一月晦日　杵築藩公用人　金子庄次郎

民部省御役所

覚

安政四巳年四月杵築ニ而出奔　木村喜一郎　当巳四拾参歳
安政六未年八月右同断　大島朝治　当巳四拾歳
文久二戌年三月右同断　岡本政太郎　当巳弐拾弐歳
文久二戊年九月右同断　末綱万吉　当巳弐拾六歳
文久三亥年八月右同断　矢野栄次郎　当巳弐拾五歳
文久四子年　右同断　田村寿碩　当巳五拾歳
文久四子年六月右同断　○加藤龍吉、当巳弐拾八歳
慶応元丑年七月右同断　牧源次郎　当巳四拾弐歳
慶応三卯年三月右同断　須藤松太郎　当巳弐拾参歳
慶応四辰年三月東京ニ而出奔　△工藤一雄　当巳参拾壱歳
明治二巳年五月大阪ニ而出奔　△山田済氏　当巳弐拾九歳

以上

右之通御座候

十一月晦日　杵築藩公用人　金子庄次郎

民部省御役所

右に依ると二十三才で脱藩し二十九才で事件を起したこととなる。其間如何にして居つたか更に判明せぬ、又脱藩の理由も不詳であるが、在藩中から所謂勤王の志があつたものか杵築藩が譜代であるので、其父喜平は藩主に遠慮して勤王活動を抑えて居つたが龍吉の意思非常に強く遂に勘当の形で脱藩した。其より長州の高杉晋作等と交り、後江戸に出て或宮様の寵を受け太刀まで賜つたといわれて居る。其につき大正年間勤王家の調査があつた際宮内省から照会があつた由である。尚龍吉同郷の

後藤利勝（高令にて没す）の話では子供の頃見た記憶では、色の白い大柄の人で、馬術の名人として聞えて居つたとのことである。江戸で死んだ龍吉の遺骨は工藤良平（別府で没した由）が持返つたとのことである。

斯くして維新の歴史に血醒い一頁を残して、空しく絞台の露と消えた郷土の生んだ勤王の志士、加藤龍吉は心誉義整居士の六字に其名を留めて生家の門前墓地の小さい一基の墓石の下に早世した、長兄智運童子と共に静かに眠つて居つたが、近年改葬せられて墓石不明となつたのは惜しい。

## 第六、加藤家略系譜

初代 加藤長右衛門 ― 二代 吉右衛門 ― 三代 龍助 ― 四代 長吉 ― 五代 喜平 ―
- 長男　勝太郎（早死、智運童子）
- 次男、長女、三男、四男　皆早死
- 五男　龍吉（明治四年三月二十九日亡「於東都」心誉義整居士）
- 六男　六代 楽 ―
  - 七代 長男　栄 ―
    - 長男　武志（死亡後嗣なし）
    - 次男　貢
    - 三男　拙次郎 ― 柾（分家）
      - 養子　八代 久（大分市長野潔弟入婿）
    - 四男　長吉
    - 五男　森造
    - 六男　与吉
    - 長女　ナカ
    - 次女　スミ

（註）智運童子　過去帳ニハ知雲童子。
心誉義整居士　過去帳ニハ心誉義整信士。

（附記）本文脱藩者中△印工藤一雄は物集高世夫人の兄重正同人ならんかと云われ偶々入手した信書を見るに之も勤王の志士らしく若し重正同人とすれば外交的手腕に富む傑物で研究の余地ある人物である。又△印山田済氏は医師兼洋学家として知られた山田龍軒の養子であつて小串為八郎、久米由太郎と併称せられ元田百平門下三偉人の一人で箕作麟祥の塾頭として在学中死亡した秀才であつた。

（杵築町在住）